Japanese association of educational psychology

準備委員会企画シンポジウム 6

助数詞と名詞の語意獲得における内的諸原理の役割：原理の制約力、バイアスの強さ、領域固有性、言語普遍性などの諸問題について

司会者　今井むつみ（慶應義塾大学）
話題提供者　仲真紀子（千葉大学）内田伸子（お茶の水大学）
小林春美（共立女子大学）針生悦子（青山学院大学）
今井むつみ（慶應義塾大学）
指定討論者　Ellen Markman (Stanford University)湯沢正通（広島大学）

企画主旨

ことばがどのような意味をとれるか、概念がどのようにレキシコンに対応するかについての知識を内的原則としてこどもは保有し、それらの原則がことばの学習を「制約」するという考えが広く受け入れられている。しかし、従来提唱されている諸原理のほとんどは名詞語意における制約であり、動詞、形容詞、助数詞など名詞以外のの語についての語意獲得原理についてはあまり研究が進んでいない。さらに、提唱されている諸原理がいつ頃から適用されるのか、どの程度強く、盲目的に適用されるのか、どういう場合には克服されるのか、また、それらがどの程度言語インプットによって影響されるのかなどの問題が近年さかんに議論されている。このシンポジウムでは助数詞と名詞の獲得に焦点をあて、英語とは非常に異なる言語構造を持つ日本語のデータを英語データと比較しながら、これらの問題を考えたい。

助数詞の獲得に見られるブートスラッピング　仲真紀子

仲は幼児が養育者との対話の中でどのように助数詞を用いているかを調べ、養育者による言語的入力と幼児による規則の抽出に注目し、両者の関係について考えてみたい。資料の収集は、母親が幼児(2歳、3歳または4歳)にクッキーやアメをとってもらうという日常場面を設定し、やりとりを収録するという方法によって得、この対話の中で生じた助数詞をカウント、分析した。その結果、以下の知見が得られた。

(1)2歳児でも「個、つ」など一般的な助数詞を用いる。また3歳から4歳になるにつれ、「枚、本、杯」など、特殊な助数詞の使用が増える。

(2) 母親は、大人に対しては一貫して特殊な助数詞を用いるが、子どもに対しては、その言語レベルに応じて一般的な助数詞と特殊な助数詞の使用の割合を変化させる。また、助数詞の誤用に際してのフィードバックも、2、3児に対しては、助数詞が必要な場合につけないという誤用に対して一般的助数詞「つ」や「個」を追加する傾向にあったのに対し、3、4歳児には「つ」の誤用を正しい助数詞に置き換えるフィードバックが特徴的であった。

以上、全体的に見れば、母親は幼児の認知能力のレベルによってインプットを調整し、それによって幼児の助数詞の使用は支えられていると推察される。しかし一方で、母親のインプットに反して特定の助数詞を多用するなど、母親の模倣ではない、幼児独自の助数詞使用も見られた。こういった現象は、幼児がごく初期においても何らかの内的ルールをもっていることを示唆している。従って助数詞の獲得は、養育者の側からのインプットの調整と幼児の側からの一貫性のあるルール形成をしようとするバイアスとの相互作用と考えられるのではないだろうか。

幼児の助数詞の獲得における「内的原理」の役割　内田伸子

語意学習を導く内的原理の多くは名詞語意に関するものである。本研究では英語の可算・不可算文法とは大きく異なる事情に複雑な分類学的カテゴリーとcross -cutする仕方で名詞をクラス分けする助数詞に焦点を当て、助数詞獲得における内的原理（意味ルール）の性質とその適用のされか名詞の場合と比較して考える。日本語における生物助数詞と意味カテゴリーの分割基準が異なるMandarinの生物助数詞の獲得過程を比較することにより、意味カテゴリーの構成のされ方（意味カテゴリーの分割基準）が内的ルールの形成とその適用の仕方にどのような影響を与えるのか、また内的ルールの形成に一般的認知能力がどのように関わるのかについて考える。

日本語話者は人、匹など身近な事例・典型事例が早く獲得され、5歳後半までには各助数詞がかなり適切に使えるようになり、意味基準の意識化も可能になる。Mandarinの場合

NII-Electronic Library Service